

第16回ピースポート「旅と平和」エッセイ大賞 次点作品集

時空を超えて／小泉花音さん ……

人生という旅／森島結さん ……12

旅する「心の平和」／阿部裕紀子さん ……18

時空を超えて／小泉花音さん

中学2年生のときの国語の授業で、「黒い雨」という小説を読みました。原爆落
下後の広島を、被爆者自身の目線から、日記調で描いた作品です。

紅く、紅く、燃えさかる家々。消えてゆくうめき声と、広がってゆく閑けさ。死
臭を放つ屍の、膨れあがり青く変色した姿。そして、その後何十年にも渡って、心
と体とを蝕んでいった放射能。

この小説を読みながら、私は泣きました。原爆。戦争。核兵器。それまで私に
とって「歴史用語」だった言葉たちに、命が吹き込まれていきました。そして、最
後の授業の作文で、私はこう綴りました。

「戦争をなくしていくのは、私たちだ」と。

1年後、中学3年生になったとある冬の日。中学校の壁に掲示されていた1枚の
ポスターが目にとまりました。「高校生平和大使 選考会」と題されたそのポス
ターには、次のような旨の文がありました。

「高校生平和大使」とは「高校生1万人署名」を、スイスの国際連合へ提出する
高校生のことです。そしてこの「高校生1万人署名」とは、2001年に長崎の高
校生が始めた「核兵器の廃絶」を目指す署名活動です。今では全国各地へ広がって
いて、高校生たちが街頭に立ってマイクを持ち、市民に署名を呼びかけています。
2018年度からはノーベル平和賞にもノミネートされている活動です。

文章を読み進めていくうちに、段々と体の力が抜けていくのが感じられました。気が付いてしまったからでした。あんなにも涙を流し、作文まで書いて固く決意しておきながら、なあんにも行動を起こせていなかった自分。

情けなくて仕方がなくて、選考会への応募を決意しました。「黒い雨」を読み返し、3月に選考会を迎え、あつという間に4月。家に届いた封書に刻まれた「東京 選出平和大使 小泉花音」の文字を目にしたときは、思わず目を疑いました。本当に、奇跡的に、平和大使に選んでいただくことができたのでした。

平和大使になったらならで、大忙しの日々が待ち受けていました。まずは6月、広島への研修です。これが私にとって初めての「旅」となりました。

原爆資料館を訪問し、写真や生で見る遺品のあまりの痛々しさに目を背けたくなくなる心を、必死で押さえつけました。平和公園のボランティアガイドの方々や、街頭署名にご協力してくださった市民の方々、そして被爆者の方々と直接お話ししたりもしました。彼らの平和を希求する声が、胸にずしりと重たく響きました。

平和公園の石碑に刻まれた、とても有名な言葉があります。

「安らかに眠ってください 過ちは繰返しませぬから」

彼らはそろって、この言葉を口にしていました。

夜、広島風お好み焼きで満たされたおなかでホテルに帰り、ふと窓の外を眺めました。そこにはすっかり復興した街並みがきらめいていて、とても綺麗でした。その夜景の片隅にぼっと浮かぶ、ライトアップされた原爆ドーム。幻想的な美しさを放つそれを見たとき、私は背筋をすっと伸ばしました。

8月初旬。今度は長崎への研修に参加しました。2度目の「旅」です。

この長崎研修では、全国の「高校生1万人署名活動」メンバーが一堂に会し、ともにフィールドツアーを行ったり、学習会に参加したりします。夏の太陽がじりじりと肌を焼く中、資料館や平和祈念館、そして浦上天主堂などの平和遺構の数々を訪れました。その1つ1つを目に焼き付ける想いでいたら、熊本の子に「顔が怖い」なんて言われてしまったりもしました。

学習会では、被爆者の方をお招きしてお話を伺いました。笑みがとても柔らかな女性でしたが、がんと抱えていらっしやって、余命はもうわずかでした。

「他人の痛みを想像する心から、平和は生み出される」

彼女のこの言葉は、胸に深く、でも優しく刺さりました。

あつという間に8月中旬になり、スイス派遣が始まりました。派遣中は、まさに怒涛の日々でした。国際赤十字・UNICEF・WVCAなどの錚々たる国際団体の本部を訪問し、被爆者の方が作られた千羽鶴をお渡ししたりしました。どの団体の皆さんも私たちを大歓迎してください、私たちの世代へ向けられた強い期待を改めて肌で感じさせられました。

ホテルに帰り、真つ暗になった部屋のベッドの中で、「平和って人類のリレーみたいだなあ」、なんて考えました。過去から未来へ、古い世代から若い世代へ、パトンが受け継がれていくのです。

とうとう国連訪問の日がやってきました。国連軍縮局長の前でスピーチを行い、「高校生1万人署名」21万筆を提出しました。この時のスピーチには、これまでの「旅」で出会ってきた言葉たちを取り入れました。

「安らかに眠ってください 過ちは繰返しませぬから」

この言葉には様々な解釈がありますが、「人類の平和への想いの象徴」のように私には感じられました。この21万筆の1つ1つに、1人の人間がいる。その当たり前の事実を、改めて強調しました。

「他人の痛みを想像する心から、平和は生み出される」

安全保障論などの「現実」に向き合っている国連の外交官の皆さんに、そしてひいては各国のリーダーの皆さんに、1人の人間として、すべての根底を見つめなおしてみたいという願いを込めました。

「平和は、人類のリレーだ」

「次の世代」としての自分自身の決意を込めるとともに、このスピーチを耳ししてくださっている皆様ご自身も「今の世代」なんだ、ということを強調しました。

最後に、私の全てのきっかけが「黒い雨」という1冊の小説だったことを伝えました。物理的に広島・長崎に行くことができなくても、本だったり、映画だったり、写真だったり。「知る」方法はあなたのすぐそばにある。あとはあなた次第だ。

さて、ここで終われそうな私のエッセイなのですが、まだまだ続きます。

帰国後も署名活動が続けていく中で、少しずつ、でも確実に、無力感にさいなまれるようになっていきました。スイス派遣で軍縮の「現場」を目の当たりにしてしまったことや、安全保障論について本格的に勉強し始めたこともあり、自分たちの活動に興味を見出せなくなってしまったのです。こんな1筆で世界は変わるのかな、と。

そんな秋のある日、「ホテル・ルワンダ」という映画を観ました。ルワンダ大虐殺の惨劇を、生まれて初めて知りました。言葉にできない感情で、涙が溢れました。悲しみと、苦しみがごちゃ混ぜになって、何が何だかよくわからなくなったような感情でした。

調べてみて、今のルワンダは「アフリカのシンガポール」とも称されるほどの大発展を遂げていることを知りました。民族間の紛争を乗り越え、人々が平和に共存しているのです。

「行ってみよう」

そう強く思いました。自分たちが創っていかねばならない「平和」について、何かヒントが得られるような気がしました。

さて、「トピタテ留学ジャパン」という、文科省主催のプロジェクトがあります。

留学を志す高校生や大学生に自分たちで留学計画を立てさせ、それを審査し、妥当だと判断した留学計画には奨学金を与える、というものです。私は、「ルワンダ平和旅行」と題した1か月間の留学計画を何とかして練り上げ、応募しました。

しかしながら、未来がどうなるかは誰にも分からないもので、新型コロナウイルスのパンデミックが幕を開けました。学校は休校になり、署名活動も自粛を余儀なくされ、「トピタテ」は審査中止になりました。

最初は「仕方がない」と割り切ろうとしましたが、やはり、ルワンダへの未練が抜けきらないままでした。ふと気が付いたらルワンダについて調べている、そんな日々が続きました。

4月のある日。例の如く調べていたら、興味深いオンラインイベントを発見しました。「ルワンダバーチャルツアー」です。ルワンダの観光スポットをガイドの方と一緒に巡ることができるといって、現地のZOOが主催しているイベントでした。

いよいよ当日。ZOOMミーティングに入ると、ルワンダの首都・キガリにある虐殺資料館の写真が映っていました。そのまま、ガイドの方とともに資料館などの平和関連施設を巡り、最後に、虐殺後に生まれた子供たちへのインタビュ動画が流れました。

「僕は今、平和だ。僕の子どもたちにも、平和に生きてもらいたい。」

小学生の少年が、そう語っていました。もやがかった私の視界が、さあっとひらけました。

「旅」って、いったい何なんでしょうか。

私なりに、私の心の中のちっぴけな辞書の中を精一杯探しまわってみて、その終着点は「共感」でした。

広島、長崎、スイスへの「旅」を経て、私は確かに多くのことを感じ、学びました。でも、ルワンダへのバーチャルツアーでもそれに負けないくらい沢山のことを感じだし、学んだと思います。そしてそれは、「黒い雨」「ホテル・ルワンダ」についても同様なのです。

「旅」を通して、人は新たな「人」と出会い、彼らに「共感」し、学びや感動を得る。

そう定義すれば、物理的な移動は「旅」の必要条件ではありません。また、「旅」は、時に縛られることもありません。映像作品や文章作品を鑑賞して、その中に出てくる「人」やそれを作り上げた「人」の想いに「共感」することも、「旅」といえるのではないのでしょうか。

「人間は、自然のうちで最も弱い一本の葦にすぎない。しかし、それは考える葦である」
何百年か前、パスカルはこういったそうです。大いなる自然を前にしたとき、人間なんてほんのか弱い存在に過ぎない。ただし人間は、思考し、想像する力を持っている。ゆえに、偉大な存在なのだそうです。「共感」できるって、凄いいことなんです。

このコロナ禍で、私が代表を務めている「高校生1万人活動東京支部」では、2度の「オンライン修学旅行」を企画・運営しました。行き先は長崎と静岡です。動画はYouTubeで公開し、「いつでも」「どこでも」視聴できるようにしました。

結局は、国連でのスピーチに全てが込められていたのかもしれませんが。

人生という旅／森島結さん

同じ人は一人もいない。全ての人が違う価値観の中を生きている。全員が自分らしい人生を送ることは不可能であり、価値観の衝突は時に多くの人を殺す。そのような現実の中で人はどうやって平和を見出していくのだろうか。

一つ、私が価値観の違いを目の当たりにした経験を話したいと思う。私は小学校一年生まで長崎で暮らしていた。私の通っていた小学校は原子爆弾が投下された場所から一番近いところにあつたため、毎週のように平和の授業があり、原子爆弾の恐ろしい威力やその後の人々の苦しみについてなど、平和がいかに大切か耳にタコができるほど教わっていた。当時の私は幼いながらに、爆撃を恐れる心配のない平和な世界に感謝していたのだ。そのような中、私は大きな転機を迎える事になる。父の仕事の関係で東京へ転校する事になったのだ。私の中で東京とは夢のような場所、そこに住んでいる人は全てのことを知っている「すごい人」だと思っていた。しかしそれは違っていた。行ってみると東京でできた新しい友達とは「普通の人」で、話すことだって長崎の友達との会話と似たような内容だった。一つのこと

を除いては。ある時私は友達に、「長崎ってどんな所？」と聞かれ、「原爆が落とされた所だよ。」と答えた。しかしその友達は原爆の存在を知らなかったのだ。これは私にとって驚くべき出来事だった。長崎にいた頃原爆を知っていることは当たり前であったのに、それは東京の小学生の前では通用しなかったのだ。常識だと思っていたことが他の地域に行くとは通用しなくなる。価値観の違いとはこういうことなのかと思った。

場所が違えば生活が違い、文化が違い、生き方が違い、価値観も異なる。考えてみれば当たり前のことだ。それを私は長崎から東京への引越という「旅」を通して体験した。もしかすると、人が今日まで重ねてきた数えきれない数々の戦争の要因の一つは、この価値観のぶつかり合いなのではないだろうか。自分たちの価値観を押し付け合うことによって生まれる「自分が正しい、相手が間違っている」という意識が膨らんだ先に待っているのが「戦争」ではないだろうか。では、どうすれば戦争にならないのか。私は互いの存在を肯定し合うことが一番重要なのではないかと思う。

ここでその考えに至った思い出を二つ紹介しよう。一つ目は、私が中学生の時にうけた「いじめ」の話だ。その時は突然やってきた。原因は覚えていない。ただその日から私の周りの空気が凍ったのだ。誰も私の目を見なくなった。皆が私と話すことを拒み、気づけばクラスの悪者と化していたのだ。だから私は自分を守るために自分を変えた。まるで自分が存在しないかのように振る舞った。クラスメートが自分を避ける姿を見るのが怖くて、いじめられている現実を認めたくなくて、クラスの中で存在感を消すことに尽力した。人との関係を断ち、孤独を受け入れた。いじめの相手を嫌い、いじめられる要素がある自分を嫌い、人を信用しなくなった。私はこの経験で、権力の前では、簡単に心が揺らいでしまう人間の弱さを知った。

そんな絶望を乗り越えたきつかけは、実に意外なことであった。私がいつも通り学校に来てポツンと椅子に座っていた時、ある女の子が何気なく一言「おはよう。」と呼びかけてくれたのだ。その言葉に救われた。私が邪魔な荷物のように扱われていた世界で初めて人になった気がした。人にとって必要なのは誰かが呼びかけること、私たちの何気ない呼びかけが、誰かを救う、そう実感した。呼びかける

こと、それは言い換えると、誰かと会おうとも言える。出会いとは平和への最初の旅かもしれない。この経験から私は彼女のように自分もなろうと思った。

二つ目は、高校に入学した時の新しい出会いだ。中学生の時のいじめは時の流れとともになくなり、継続校の高校に入学した。高校は受験で入ってくる新入生が学年の半数を占めるので、新たに友達がたくさんできた。この出会いの中で、かけがえない存在がある。私はある一人の女の子に出会った。彼女と距離が縮まったのは二人に珍しい共通点があったからだ。私たちはともにキリスト教を信じていたのだ。キリスト教を信じている人は日本でとても少なく、学校内で出会えるとは夢にも思っていなかったもので、本当に嬉しかった。それと同時に「私は彼女と同じなのだ」という勘違いをした。それは大きな間違いだった。彼女は驚くほどできる人だった。成績は常にトップで芸術的な才能もあり、感心するしかなかった。純粹に彼女には敵わないと思った。そんな彼女の存在は私の生き方に大きな刺激を与えてくれた。現状では決して満足せず、高みを目指す姿や、新しいことに進んで挑戦する行動力は、私に足りなかったものだ。

ところが、私にも彼女に無いものがあつた。それが長崎での経験だ。修学旅行のため長崎についてプレゼンを準備している時だった。ふとした事から私が長崎で出会った身近な被爆者の話を伝えると、仲間たちはその話に心動かされ、涙を流し始めた。その時、知識や努力ではとらえられない領域があると知った。経験しなければ自分のものにならないメッセージであり、存在を通してしか語り出せないものがあつた。私たちは仲の良い相手を自分と同じような存在と決めつけてしまいがちだが、その人の優れたところに触れ、互いの性格に無理矢理合わせ合うのではなく、肯定し合うことで初めて人間は異なる他者に自分を語れるのではないかと思つた。

歴史の中で、残酷な行爲をした戦争もあり、過去は変えられない。けれども、起きた出来事の見方を変えることはできる。変わるべきなのは今を生きる私たちだ。自分たちの犯した過ちを知り、相手の価値観を知ること、初めて一歩前に進めるのではないだろうか。この先の人生、自分の物差しで見れば理解できない考えの持ち主に出会うことは幾らでもあると思う。そんな時こそ、互いの価値観を受け入れ、自分の殻から飛び出して相手と出会ふことで、初めて未来が明るいものになるのだろう。もちろん、他者の価値観を受け入れることは現実を生きていると想像

上に難しい。価値観とは私たちの体に染み付いているからだ。そのズレを認め合うためには自分の外に出て一緒に過ごす時間と心が必要だ。だとすれば、人生の旅で与えられる出会いの先には、「平和」という成長した人間のゴールが待っているはずだ。その旅の始まりとして、まず一声、他者に声をかけてみよう！

旅する「心の平和」／阿部裕紀子さん

「ああ。暑い。」
32度を超える炎天下の昼下がり、私は常夏の島フィジーのバス停で、ベンチに腰掛けて30分以上バスを待っていた。バス停といっても、木材を張り合わせて作った、柱と日よけの屋根しかないバス停だ。だから、ただひたすらに暑い。

フィジーには「フィジータイム」という、フィジー特有のまったりとした時間が流れる。基本的に、お店の営業時間も決まっているようで決まっていない。家賃の支払いも支払日を過ぎててもほとんど催促しない、お金があるときに払えばいいのだ。

そのため、路線バスが時刻表通りに来た試しがない。だから、この日のバスの遅延も想定内ではあったが、暑さと先の見えない待ち時間に私のイライラが募っていた。

そこへ、フィジアン女性が来てベンチに腰掛けた。（フィジー人のことを「フィジアン」という。）私の身体の二倍以上ある大柄な女性で、典型的なフィジアン女性だ。彼女は腰かけて一息つくつと、私に話しかけた。内容は他愛もない事で、「あ

なた日本人？いつからここで暮らしているの？素敵なんピースね。とても似合っているわ。」という内容だ。

フィジアンはとても人懐っこい性格で、外国人の私にも隣人のように話しかけてくれる。そんな彼女の気さくさに、私のイライラは少し癒された。

彼女と話しをして10分以上経過しても、一向にバスは来ない。私は、「それにしても全くバスが来る気配ないですね。すごく暑いし、今日はツイてないかも。」と漏らした。

そんな私に、彼女は「確かに今日は一段と暑い。だけど、バスが遅れてくれていいおかげで、私はあなたと楽しい時間が過ぎてラッキーだわ！」と笑いかける。

この彼女の言葉に、私はハッとした。これがフィジアンだ。とてもポジティブで大抵のトラブルも笑って乗り越える、そんな彼女のメンタルの強さを感じた。

それから更に15分近く、私たちはバスが来るまで会話をして過ごした。この何気ない日常と彼女との出会いが、さらに私をフィジアンに夢中にさせた。

私がフィジアンという小さな島国で過ごしたのは6カ月。2016年から2017年にかけて1年間休職し、海外で自由気ままな生活をした時のことだ。

はじめに3カ月間フィジアンで語学留学し、その後ほかの国で4カ月過ごしてから、家族同然となっていたフィジアン人のホストファミリーのもとへ戻った。それから3カ月は学校へ行かず、仕事もせず、ただ家族と家事などをして過ごし、まったく「フィジアン」として毎日を過ごした。

そもそも私が留学先にフィジアンを選んだきっかけは、大学時代にさかのぼる。研究でアフリカを訪れた際の、一人の青年との出会いだ。

大学4年の夏、私はアフリカのザンジバル島（タンザニア）に2週間滞在した。そこで、2日間の自由時間を与えられ、私はホテル周辺の路地をウロウロしたり、路上で出会った子供たちと遊んで過ごしていた。そんな中、路上でサングラスを売っている青年と出会う。

彼は、シャバニ（当時20歳）。彼は店番をしながら、本を読んでいた。

私は彼に声をかけた。彼は嬉しそうに私を出迎え、つたない英語で言う。「僕は今、英語の勉強をしているんだ。だから、僕の話し相手になってほしい」と、素敵な笑顔を見せた。

彼が手にしていた本は英語の教科書で、日本でいうところの中学二年生レベルの教科書だ。私たちは、英語とスワヒリ語を交えながら何時間も路上で語り合った。

シャバニは20歳だが、家庭が貧しくサングラスを売りながら生計を立て、そのお金で週に2日学校に通っているそうだ。彼はとても気さくで、日本のことや私が旅してきた外国のことを知りたがった。いつか海外旅行することが、彼の夢だと教えてくれた。

私が日本に帰る前の日、私は再びシャバニのもとを訪ねた。彼は真っ白い歯が印象的な笑顔で、私との最後の時間を楽しそうに過ごしてくれた。お互いの話をしながら、私が「シャバニは今幸せ？」と尋ねると、彼はこう答えた。

「毎日町中にコーヒーの香りがして、ここには素敵な道がある。ここに座っていれば、多くの出会いもある、こんな風にね。これ以上に幸せなことってある？」

それまでの私は「幸せ」とは、好きなものを食べられることや、自由に旅行ができることのように、「ちよつと贅沢できること」だと思っていた。

ただシャバニが言うように、今いる現状に幸せを見出せたら、いつだって私は幸せなんだと気づかされた。この時から、私の中で「幸せって何？」という疑問が何度も浮かんで、自問自答する日々が続いた。

シャバニと出会ってからの私は、幸福度の高い人になりたいと思うようになった。だから、社会人になってから留学を決意した時も、「留学 幸福度」とネット検索をした。そして、一番はじめに国名が出てきたのがフィジーである。フィジーは世界の中でも幸福度の高い国だ。それまで、行ったことも聞いたこともなかったフィジーという国に留学を決めたのは、幸福度の高い国で暮らしてみたかったからである。

こうして、私はフィジーでの生活を始めたのだ。

停電3日目。

ライフラインが安定していないフィジーでは、台風の前後などに停電・断水することは珍しくはない。私たちの家も、3日前から停電が続いている。だけどガスはプロパンガスだし、今回は水道も止まってない。電気がない生活にも慣れつつあった私にとって、停電はそう辛くはない。ドライヤーが使えないとか、スマホが充電できなくて不便ではあるけれど、それはそれで何とかなるものだ。

しかし、それが3日も続くと少し憂鬱な気分になる。シャワーに行く時やトイレに入るときは懐中電灯を持って行かなければならないし、テレビやラジオが使えないから家族団欒の時間もだんだんと退屈になる。

「あー、いつになったら電気使えるんだろう。楽しいことも電気と一緒に全部止まっちゃったみたい」ベッドの上でゴロゴロしながら、私は言った。

すると、弟のひとりが懐中電灯をもって、私を真っ暗な庭に連れ出した。彼が懐中電灯の明かりを消すと、空には日本では見たことのないような星空が広がっている。

「今日もテレビを見れなくて残念だけど、停電のときはみんなも電気を使えないから、こんなに綺麗な星を見ることが出来るよ」と無邪気にいう弟。

私の中の「フィジアン」は、まだ少しネイティブには程遠いなあを思わず笑ってしまった。

このような気がつきがあったから、私は日常で「幸せ探し」をすることが癖になった。

たとえば、日本から送ってもらった荷物が3週間も遅れて届いたとき。今までの私なら間違いなく不安になるし、何度も郵便局に問い合わせただろう。しかし、

「フィジアン」になりたいと、幸せ探しを始めた私は違う。荷物が届く日を過ぎて

も、「荷物を受け取るまで毎日ワクワクできる!」と、荷物の到着を楽しみに待っていることができた。

また、日本に戻ってからは、指定時間に宅配便が届くという当たり前システムのとても感動した。

日本では、当たり前のようにバスが時刻表通り来て、当たり前のように電気が使えて、学校にも当たり前前のように通えて、戦争だって身近にはない、そんな平和な日常が当たり前にある。

だから私は旅に出て、日常から離れることで「当たり前」に気が付かされるのだ。

非日常を味わうことで、「私の日常って平和なんだなあ」と再発見し、「平和って幸せなんだ」って思うことができる。

言葉や文化、宗教が異なる彼らから、私は共通するものを教わった。

同じ事実を目の当たりにして、ネガティブにとらえてしまった私と、ポジティブにとらえて幸せを感じる彼ら。そんな彼らから、私は「心の平和」を教えられた。

それまでの私は「平和」とは、環境とか暮らしのように物理的なものに表す言葉だと思っていた。けれど、彼らに出会ったことで私たちひとりひとりの「心」にも当てはまるのだと気づいた。心が荒れるのは、戦争。心が貧しいのは、貧困。きつと、世界に戦争や貧困があるのは、人々の心で戦争や貧困が起きているから。人々の心が穏やかに、豊かになれば、きつと戦争を起さそうという気持ちはなくなるのに。

この「心の平和」が、誰かの心にも届きますように。その誰かが、また他の誰かに伝えてくれますように。はるか遠い国で私が気づかせてもらったように、この幸せな心の在り方を、身近な人やこれから出会う人にも知ってほしい。その連鎖で、「心の平和」が世界を旅してくれたら、きつと、もつと、世界は平和だ。

あれから4年。私は日本で暮らしながら、「心はフィジアン」を意識して過ごしている。日常で落ち込むこともあるけれど、フィジーで過ごす前の私よりずっと前向きで、毎日を幸せだと心から感じながら生活できている。旅先でトラブルに見舞われても、「土産話のネタができたぞ」とニヤニヤしてしまうほど前向きだ。

それに、彼らからもらった「心の平和」をいう手土産を今も配っている。その手土産が、世界を旅してくれることを願いながら。